

△新刊紹介△

鳥谷部陽之助著

「春汀・秋嶺をめぐる人々」

千葉 良一

春汀とは、五戸町蛇川の産。「明治評論」を主宰し、政治家の人物月旦は天下の絶品といわれ、その後博文館の綜合月刊雑誌「太陽」を編集し、最終的には編集長として名をなし、その向、「報知新聞」の主筆をもつため、一貫して新聞・雑誌界でジャーナリストとして活躍した鳥谷部春汀のことである。

秋嶺とは、同じく五戸出身の思想家で「或る百姓の家」に、「土と心を耕しつゝ」、「地涌のすがた」の三部作をはじめ、「場の研究」などで知られている江渡秋嶺である。

本書は、この春汀・秋嶺を軸にして、彼等を取りまく人々を通して、明治の民権運動を中心として流入した近代的な思想が、春汀や秋嶺の仕事にどんな影響をおよぼしたかを究明しようという意図したものである。

序文において、小野正文氏は、

「青森県の三戸郡五戸町という一地域から、文筆家鳥谷部春汀と思想家江渡秋嶺が相次いで世に出て注目

すべき活躍をし、その足跡を残したということには、どういう契機がひそんでいるのであろうか。(中略) この二人の文人の生涯と思想を、その関係において捉えようとする試みはさらに高次の要請を包含ものである。(中略) 春汀と秋嶺の二つの大きな存在を解明する緒として、鍵として必要な人物が孤嶺鳥谷部陽太郎であった。孤嶺の血を享けついで藎若を待つことによつて、はじめて、「春汀・秋嶺をめぐる人々」というテーマが追求され、展開されることになったのは決して單純なる偶然ではないのである。(後略)」

とのべられているように、春汀・秋嶺の人脈をたどることによつて、南部を代表するこれらの人々が単に孤立した、偶然的に輩出した人々ではなく、それを生み出す土台としての鳥谷部家の人脈や彼等を取りまいている南部の人脈を構造的に把握して立証しようという試みをしている。

このような立場から、本書は、前半を「北奥の風土にはぐくまれた人々」として、春汀・秋嶺、大塚甲山、孤

嶺島谷部陽太郎との間の人間関係と、それらの関連を画しての思想形成の端緒にふれ、後半を「ある思想の系譜」として、春江・秋嶺の思想を培うに大きな影響を与えた人々、自由民権運動家中市稻太郎・中市の従弟嶺島谷部健之助―地方政治家として重きをなす―、健之助の弟悦人―教育者・伯父として秋嶺を教える―などの関連を通しての思想の形成について探求し、それが春江を通して政治家の人物月旦へとつらなり、秋嶺をして政治に志しをむけさせ、大学の法科に進学したのが、後に政治科へと転科させたと指摘している。しかし秋嶺の資質は政治の世界よりも、自己を自己たらしめる精神生活に自己独立の道を見出し、トルストイアンとして人道主義的立場をつくりあげ、またクロボトキンにしたしみ、「アナキズム―重農主義者」として、田園生活に入り、百姓愛道場を営み、独自の人生を歩む過程を紹介している。彼の影響を受けて嶺島谷部陽太郎の兄弟愛運動へ発展を説き、大正期の文化運動の一端を、南部出身の文化人の動きの中から描いて、今日なお健在で活躍している能田多代子氏もその一群としてあけている。いずれにしろ、大正期の文化運動、思想運動の側面を解明する手がかりとして、これらの群像は、今後あ程度究明さるべきものであり、これらの究明の手がかりとして本書は、今後読みながれるものと考えられる。

紹介者自身未知な分野であり、意味を十分に解し紹介ができないのが残念であるが、新田角度で、明治、大正、昭和の三代をつらぬく近代思想の流れの中に生まれた種々の思想を新田角度から評価し直されている現在の状況から、本書の価値を評価したいものである。

前後に、新田その他寄稿をまとめられているので、整理不十分で意味のとりにくい所やくり返しが多い点、整理されたり、読者として幸いである。著者の自愛を祈ってやまない。

(津軽書房刊)